

『西洋医言』の諸本と『類聚紅毛語訳』

櫻井 豪人

要旨

刊本として日本初の意義分類体日蘭対訳単語集である森島中良編『類聚紅毛語訳』（寛政十1798年序刊）が編纂された際、最も中心的な参照資料となったと目される宇田川玄随編『西洋医言』（寛政四1792年成、写本）の現存諸本六種について分析し、異同状況や本文の修正過程を示す。また、森島中良が『類聚紅毛語訳』を編纂した際に使用した『西洋医言』の本文が、修正過程のどの段階のものであったかについても明らかにする。

1. はじめに

刊本として初の日蘭対訳単語集である森島中良編『類聚紅毛語訳』（のちに『蛮語箋』と改題）は、杉本つとむ1978などにより、写本の意義分類体単語集である宇田川玄随（槐園）編『西洋医言』（寛政四1792年成）を利用して編纂されていることが報告されている。

しかし、その『西洋医言』は、著者の宇田川玄随や校者の田綱叔紀により本文に修正が加えられた形跡があり、写本として流布した『西洋医言』には、その修正を原因とする本文異同が各伝本間で見られる。現存諸本の源となった宇田川玄随自筆本の早稲田大学図書館洋学文庫蔵『西洋医言』（以下「早大本」）には、上から「貼り紙」をして本文を書き改めるような修正を施した箇所や、「白墨」（しろずみ・しらずみ、現代でいう修正液のようなもの）を塗った後に本文を上書きする修正を施した箇所が多く見られるのであるが、特に『類聚紅毛語訳』（『蛮語箋』）との対照を行う際において、修正前の本文によるべきなのか、あるいは修正後の本文によるべきなのか、にわかには判断がつかない。そこで本稿では、『類聚紅毛語訳』の編纂方法について考察する前段階として『西洋医言』の現存諸本の分析を行い、本文の問題を解決すべく考察を試みる。

2. 先行研究

『西洋医言』について詳しく考察した先行研究は杉本1978が唯一のものと思われるが、そ

こで主に扱われているのは早大本であり、他本については東京大学総合図書館鸚軒文庫蔵本（以下「東大総図本」）と小石秀夫氏蔵本（当時、現在は小石元紹^{もとつぐ}氏蔵、巻中のみ現存、以下「究理堂文庫本」）について軽く触れられているのみである。

飛田良文1993は、『類聚紅毛語訳』の〈天文〉〈時令〉〈言語〉の各部と青木昆陽編『和蘭文字略考』（延享三1746年成）および『西洋医言』の該当箇所を比較して論証した上で、両者を直接の資料源と認め、語数の上からは〈天文〉でも〈言語〉でも『西洋医言』が第一資料源、『和蘭文字略考』が副資料源であったと結論付けている。その際に用いた『西洋医言』は早大本であり、杉本1978に掲げられている小石本（究理堂文庫本）と東大総図本についても触れられてはいるが、本文異同については言及されていない。

3. 現存する『西洋医言』諸本の概要と「大規模な本文改訂」について

筆者は現在、『西洋医言』に六種の伝本が現存していることを把握している。そのうちの三本は、上記の先行研究でも扱われている早大本・東大総図本・究理堂文庫本であるが、それら以外に武田科学振興財団杏雨書屋蔵本（以下「杏雨書屋本」）・東京大学医学図書館蔵本（以下「東大医図本」）・津市図書館稲垣文庫蔵本（以下「稲垣文庫本」）が存在する。

結論から言えば、『西洋医言』の最善本は宇田川玄随自筆本である早大本であり、特殊な事情がなければ早大本の本文によるべきである。しかし、その際においても、早大本に数多く見られる修正の痕跡がどのようなものであるのかを把握しておく必要がある。

上記六本のうち、早大本と杏雨書屋本が玄随自筆本であるのに対し、稲垣文庫本・東大医図本・究理堂文庫本・東大総図本は他者の書写による写本である。そして、玄随自筆の二本は共通の箇所「貼り紙」や「白墨」による本文の修正が行われており、いわば兄弟関係にある本である。その「貼り紙」や「白墨」による修正は数回に分けて行われたと見られるが、ある時期に大規模な改訂が行われた。その大規模な改訂とは、ごく大雑把に言えば「長文の貼り紙」による修正（後述）とそれに伴う修正をさすが、本稿ではその大規模改訂前の本文を「(大規模)改訂前」の本文、大規模改訂後に書かれた本文を「(大規模)改訂後」の本文と呼ぶことにする。

この点から見ると、早大本と杏雨書屋本以外の本で改訂前の本文の姿を留めているのは稲垣文庫本のみで、他の究理堂文庫本・東大医図本・東大総図本はいずれも改訂後の本文となっている。このことが、『西洋医言』の本文異同を把握する上で特に重要な観点となる。

最善本である早大本の本文修正過程を辿るのに最も参考となる写本は、杏雨書屋本と稲垣文庫本である。本稿ではまず早大本について解説した後、杏雨書屋本・稲垣文庫本を用いた早大本の分析を示し、その後で東大医図本・究理堂文庫本・東大総図本について述べる。

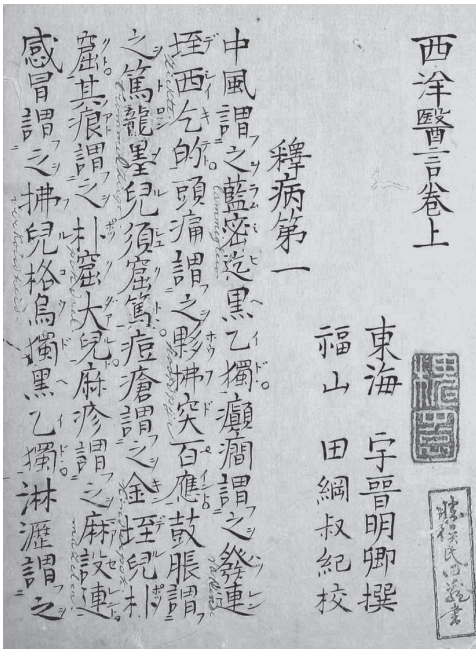
4. 早大本『西洋医言』

4.1. 早大本の書誌

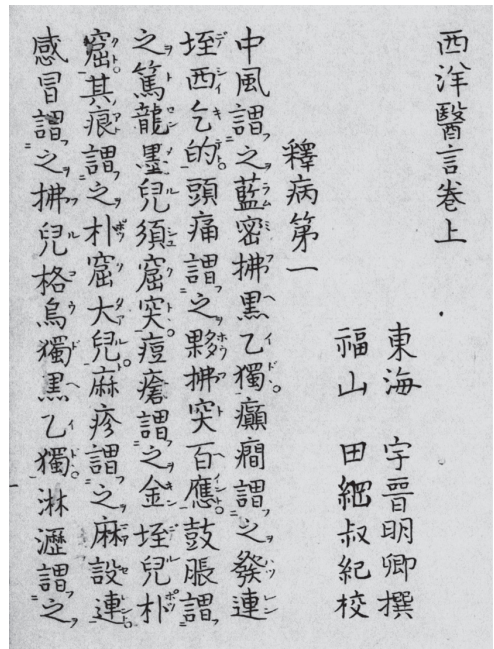
現存諸本を比較する際に基準となる早大本について、まず書誌を記述する。

早稲田大学図書館洋学文庫C22（宇田川玄随自筆本）

○装丁・書型・巻冊数 袋綴美濃本三卷合一冊。○表紙 各巻の巻首にあり。いずれも砥の粉色無地、27.2×18.1cm。○外題 上巻・中巻は左肩題簽子持枠内「西洋醫言 上巻（中巻）」。子持枠は整版、文字は墨書。上巻は虫損により「上巻」の文字が不鮮明。下巻は題簽欠であるが、左肩に貼り跡があり、その貼り跡に直接「西洋醫言 下巻」と墨書。（題簽と同筆。）○構成 上巻、「西洋醫言叙」（寛政四年壬子老冬 東都 越融撰、附訓点漢文）四葉、「西洋醫言序」（寛政三年龍在辛亥仲冬朔 門人 東都 岡島馴謹撰、附訓点漢文）四葉、本文十六葉、遊紙一葉。中巻、本文十七葉、遊紙一葉。下巻、本文十九葉。○後表紙 合冊のため下巻のみにあり、砥の粉色無地。○本文 每半丁九行、毎行十六字。（ただし、一行の文字数は本文を修正したことにより変動する。）蘭語音訳表記の左側に筆記体アルファベットによるオランダ語が朱で記されている。○内題 「西洋醫言卷上（中・下）」。○尾題 「西洋醫言卷上（中・下）終」。○印記 越融による叙の冒頭と巻中・巻下の本文冒頭に「宇田川圖書」の丸朱印（陽篆）、各巻本文冒頭に「槐園」の方朱印（陰篆）あり。これらの朱印が、宇田川玄随自筆本であることを裏付ける。巻上本文冒頭に「勝俣氏旧蔵書」の朱印あり。旧蔵者・勝俣銓吉郎氏の蔵書印。



図版1 早大本『西洋医言』上1才



図版2 杏雨書屋本『西洋医言』上1才

なお、早大本は早稲田大学図書館がインターネット上で公開している「古典籍総合データベース」により、全丁がカラー画像で参照できる。ただし、「白墨」による修正については画像で確認することが困難な箇所が多い。

4.2. 早大本に「丁付け」と「通し番号」を与えることについて

書誌に記した通り、早大本の本文は巻上十六葉、巻中十七葉、巻下十九葉であるが、本自体には丁付けが無く、そのままでは所在の指定が困難である。よって本稿では、早大本各巻の本文第一葉を第一丁として丁付けを与えて所在を示すことにする^{注1}。

また、論述の都合上、早大本の改訂後本文の見出し語順に「通し番号」を付けて論じる。本稿で用いる通し番号は、混乱を避けるため、全て早大本の改訂後本文による通し番号を用いることにする。

以上のようにして丁付けを与え、「通し番号」を付けて見出し語数を数えた結果が表1である。

表1 早大本『西洋医言』の丁付けと語数

部名	早大本 丁付け	早大本語数 (改訂後本文)
1. 積病	上1オ～上3ウ	73
2. 積人	上4オ～上5ウ	61
3. 積体	上6オ～上9ウ	111
4. 積骨	上10オ～上12ウ	55
5. 積神	上13オ～上13ウ	12
6. 積蔵	上14オ～上16ウ	65
7. 積草	中1オ～中4ウ	109
8. 積木	中5オ～中6ウ	60
9. 積虫	中7オ～中7ウ	26
10. 積魚	中8オ～中8ウ	32
11. 積鳥	中9オ～中10オ	46
12. 積獸	中10ウ～中11ウ	50
13. 積天	中12オ～中14ウ	97
14. 積地	中15オ～中17ウ	129
15. 積器	下1オ～下6ウ	188
16. 積宮	下7オ～下8オ	45
17. 積数	下8ウ～下10ウ	63
18. 積言	下11オ～下15ウ	163
19. 積辞	下16オ～下19ウ	73
総語数		1458

4.3. 「通し番号」の付け方について

『西洋医言』は、<積病>から<積辞>までの19の部に分けて蘭語（オランダ語）とその訳語を示した単語集であるが、『類聚紅毛語訳』のように一

語ごとに罫線で区切られたような単語集ではなく、漢文体の文章の中に蘭語とその訳語を掲げるといふ体裁になっているので（図版1・2）、見出し語を数える際に判断の難しい場合がある。

本稿では基本的に、蘭語と訳語との対応が見られる語を一つの見出し語と認定した。その際、「蘭語対訳語」が「一对多」や「多対一」であっても、それで一つの見出し語と認定した。例えば<積人>の1番目「人」（上4オ）には、その訳語に対する蘭語として「^{メン}（men）」「^{メンゼン}（menschen）」「^{ペルソゾン}（perzoon）」の3語が掲げられているが、これ全体で一つの見出し語と数えて、<積人>での通し番号「1」を与えた。また、<積数>の43番目は蘭語が「^{ドラクマ}（Drachma）」となっている語であるが（下10オ）、その前では「^{スキュルブル}（Schrupel）」三ツをドラクマと呼ぶという説明がある一方で、その後でもドラクマのことを「一銭也」と説明しており、訳語が二つあるようにも受け取れる。この場合も、これ全体で一つの見出し語と数えて、<積数>での通し番号「43」を与えた。

一方、蘭語とその訳語を示す目的でない記述は見出し語として認めず、通し番号を与えなかった。例えば<積神>の末尾には「凡^{セエニウ}寫紐。直ニ腦髓從り起ル者。左右各^{セエニウ}十。脊髓從り分レ布ク者。左右各^{セエニウ}三十。共ニ八十神經為リ。」(原附訓点漢文)という二行があるが、これは「寫紐」(神経)がどのように分岐しているかという説明であり、蘭語と訳語の対応を示しているわけではないので、見出し語には含めなかった。

また、<積地>の地名については音訳漢字が示されているだけで訳語が与えられていない箇所も多いが、それらについては訳語が無くとも一つの見出し語と認め、通し番号を与えた。

5. 杏雨書屋本『西洋医言』

5.1. 杏雨書屋本の書誌

杏雨書屋本についても書誌を記しておく。

武田科学振興財団杏雨書屋乾々齋文庫5508 (宇田川玄随自筆草稿本)

○装丁・書型・巻冊数 袋綴美濃本三巻三冊。○表紙 砥の粉色無地、26.9×17.9cm。○外題 左肩単辺枠内「西洋醫言 上巻(中巻・下巻)」。単辺枠・文字ともに墨書。各巻表紙中央上部に目次の箋(単辺枠内、墨書)が貼られている。○構成 上巻、「西洋醫言叙」(寛政四年壬子老冬 東都 越融撰、附訓点漢文)四葉、「西洋醫言序」(寛政三年龍在辛亥仲冬朔 門人 東都 岡島馴謹撰、ただし早大本と異なり白文の漢文)四葉、本文十六葉(一～十六丁)。中巻、本文十七葉(丁付け無し)。下巻、本文十九葉(一～十九丁)、「宇槐園著述書目」と奥付、合わせて二葉(後述、奥付の裏丁は印刷された匡郭のみ、後表紙裏に原裝白紙あり)。○本文 毎半丁九行、毎行十六字。(ただし、一行の文字数は本文を修正したことにより変動する。)○内題 「西洋醫言卷上(中・下)」。○尾題 「西洋醫言卷上(中・下)終」。

5.2. 早大本と杏雨書屋本の関係(共通の特徴と相違点)

早大本と杏雨書屋本はともに宇田川玄随自筆本という点で共通しているが、両者の関係についてはまだほとんど明らかにされていない。そこで、他本の説明に先立って両者に共通の特徴と相違点について述べ、それぞれの性格の違いを明らかにすることから始める。

5.2.1. 杏雨書屋本末尾に付される「宇槐園著述書目」と奥付について

杏雨書屋本は、写本でありながらその末尾に、匡郭内に記された「宇槐園著述書目」(以下「著述書目」と、同じく匡郭内に「寛政五癸丑年季秋(中略)製本所 東都書林(中略)須原屋市兵衛」と記された奥付を備え、さながら版本であるかのような様相を呈している(図版3・4)。この「著述書目」と奥付の匡郭・板心には板木の欠損が見られるので、印刷され

<p>宇槐園著述書目</p> <p>西説内科撰要 全十八冊</p> <p>發無定處</p> <p>卷一 寒熱篇第一</p> <p>翁繼達安寓竭意度篇第二</p> <p>塊液篇第三</p> <p>卷二 朱芴兒陪苦篇第四</p> <p>聖宗健篇第五</p> <p>伊偏多篇第六</p> <p>諸氣篇第七</p> <p>黃疽篇第八</p> <p>膽汁敗血篇第九</p> <p>瀉瀉篇第十</p> <p>非篇第十一</p> <p>水腫篇第十二</p> <p>卷三 諸氣篇第七</p> <p>伊偏多篇第六</p> <p>聖宗健篇第五</p> <p>朱芴兒陪苦篇第四</p> <p>塊液篇第三</p> <p>翁繼達安寓竭意度篇第二</p> <p>卷四 諸氣篇第七</p> <p>黃疽篇第八</p> <p>膽汁敗血篇第九</p> <p>瀉瀉篇第十</p> <p>非篇第十一</p> <p>水腫篇第十二</p> <p>卷五 諸氣篇第七</p> <p>伊偏多篇第六</p> <p>聖宗健篇第五</p> <p>朱芴兒陪苦篇第四</p> <p>塊液篇第三</p> <p>翁繼達安寓竭意度篇第二</p>		<p>病屬腫脹</p> <p>赤利篇第四十一</p> <p>痛利篇第四十二</p> <p>重瀉苦瀉篇第四十三</p> <p>諸氣篇第四十四</p> <p>疝脹篇第四十五</p> <p>疝脹篇第四十六</p> <p>卷十五 肝筋篇第四十一</p> <p>赤利篇第四十二</p> <p>痛利篇第四十三</p> <p>重瀉苦瀉篇第四十四</p> <p>諸氣篇第四十五</p> <p>疝脹篇第四十六</p> <p>卷十六 病屬尿道</p> <p>結石腎痛篇第四十七</p> <p>尿血篇第四十八</p> <p>尿痛篇第四十九</p> <p>尿閉篇第五十</p> <p>淋瀝篇第五十一</p> <p>小便不利篇第五十二</p> <p>小便失禁篇第五十三</p> <p>痛發皮表</p> <p>疝瘻篇第五十四</p> <p>疝瘻篇第五十五</p> <p>卷十七 疝瘻篇第五十四</p> <p>疝瘻篇第五十五</p> <p>卷十八 疝瘻篇第五十四</p> <p>疝瘻篇第五十五</p>
<p>遠西名物考 全四冊</p> <p>紅毛の醫書中に於て諸藥品の形状主治方劑の名義記述をも、吾物産書に於ては、其の詳説と考(今世其真象と弁一治効の一助と)</p>	<p>東西病考 全九冊</p> <p>紅毛法名匠の著る不病候病因の詳説と考</p>	

図版3 杏雨書屋本『西洋医言』下巻末尾「宇槐園著述書目」
 ※匡郭・板心は整版、文字は墨書。図版4の奥付の直前にある。

宇田川玄隨著 梶園藏版

寛政五癸丑年季秋

製本所 東都書林

日本橋北室町二丁目 須原屋市兵衛

内景詳説 全十冊

紅毛解体の書に括て人身中の藏府骨節筋脈の氣血等切の各物主用と弁ゆして落藩の困り起るるを知らしむ

蘭譯弁髦 全五冊

紅毛の醫書の體法譯例と類聚し句法文法を解して、其の旨を明かに訓導し示すの具也

西洋醫言 全三冊

紅毛の醫書と其の體法譯例とを、其の旨を明かに訓導し示すの具也

蘭蘭敵敵載 初編五冊

紅毛の醫書に於て、其の旨を明かに訓導し示すの具也

図版4 杏雨書屋本『西洋医言』下巻奥付
 ※匡郭・板心は整版、文字は墨書。

<p>宇槐園著述書目</p> <p>西説内科撰要 全十八冊</p> <p>發無定處</p> <p>卷一 哥爾都篇第一</p> <p>翁繼達安寓竭意度篇第二</p> <p>塊液篇第三</p> <p>卷二 聖宗健篇第五</p> <p>伊偏多篇第六</p> <p>諸氣篇第七</p> <p>黃疽篇第八</p> <p>膽汁敗血篇第九</p> <p>瀉瀉篇第十</p> <p>非篇第十一</p> <p>水腫篇第十二</p> <p>卷三 諸氣篇第七</p> <p>伊偏多篇第六</p> <p>聖宗健篇第五</p> <p>朱芴兒陪苦篇第四</p> <p>塊液篇第三</p> <p>翁繼達安寓竭意度篇第二</p> <p>卷四 諸氣篇第七</p> <p>黃疽篇第八</p> <p>膽汁敗血篇第九</p> <p>瀉瀉篇第十</p> <p>非篇第十一</p> <p>水腫篇第十二</p> <p>卷五 諸氣篇第七</p> <p>伊偏多篇第六</p> <p>聖宗健篇第五</p> <p>朱芴兒陪苦篇第四</p> <p>塊液篇第三</p> <p>翁繼達安寓竭意度篇第二</p>		<p>病屬頭腦</p> <p>昏眩篇第十三</p> <p>不寐篇第十四</p> <p>卒厥篇第十五</p> <p>頭眩眩胃篇第十六</p> <p>頭眩篇第十七</p> <p>頭眩篇第十八</p> <p>頭眩篇第十九</p> <p>頭眩篇第二十</p> <p>病屬頭腦</p> <p>喉痛篇第二十一</p> <p>喉痛篇第二十二</p> <p>喉痛篇第二十三</p> <p>喉痛篇第二十四</p> <p>喉痛篇第二十五</p> <p>續刊</p> <p>卷六 昏眩篇第十三</p> <p>不寐篇第十四</p> <p>卒厥篇第十五</p> <p>頭眩眩胃篇第十六</p> <p>頭眩篇第十七</p> <p>頭眩篇第十八</p> <p>頭眩篇第十九</p> <p>頭眩篇第二十</p> <p>病屬頭腦</p> <p>喉痛篇第二十一</p> <p>喉痛篇第二十二</p> <p>喉痛篇第二十三</p> <p>喉痛篇第二十四</p> <p>喉痛篇第二十五</p> <p>續刊</p>
--	--	--

図版5 整版印刷の「宇槐園著述書目」
 (国立公文書館内閣文庫蔵『内科撰要』巻九より)

たものようにも見えるが、記されている文字には墨書による濃淡が認められるので、匡郭と板心のみが整版印刷で、内部の文字は手書であることがわかる。また、その板心には「卷之」としか記されていないので、版下作成用の汎用の匡郭・板心であったことも見て取れる。

この「著述書目」の完成版は、同時期に出版された宇田川玄随『(西説) 内科撰要』の一部の巻末などにも付されている(図版5)。宗田一1988は、一部の『内科撰要』巻三や『西洋医言』自筆板下稿本(杏雨書屋本のこと)に見られるこの「著述書目」に言及し、それに記されている『遠西名物考』『東西病考』『内景詳説』『西洋医言』『蘭訳弁髦』『蘭畝倣載』を『内科撰要』の関連書とし、これらの本を出版する準備をしていたことが知られるものの、いずれも刊行に至らなかったと指摘する。また、上の中で『遠西名物考』『東西病考』『西洋医言』は『内科撰要』の本文注に掲げられている書籍で、『内科撰要』と併読することによって欠を補い、理解を深めるよう考慮されている」とも述べている。

一部の『内科撰要』巻三に付される寛政五年の奥付も、この杏雨書屋本『西洋医言』の奥付と酷似していることから、玄随が寛政五(1793)年に『西説内科撰要』の巻一～三を出版したのとほぼ同時期に『西洋医言』の出版も意図していたことが知られる。

以上のことから、杏雨書屋本は『西洋医言』出版のための草稿本と見られるのであるが、早大本にはこの「著述書目」と奥付が無い。後に見るように、早大本はこの草稿本のもととなった本であり、なおかつ玄随が最後まで手元に置いて修正を加えた本と目される。

この「著述書目」には『西洋医言』に対する記述もあるので(図版4)、以下に引用する。

西洋醫言 同 全三冊

紅毛の医書をよみ習ふ社中の初学に便するか為に病名薬名鳥獸草木等より一切医事にあづかる蘭語を誦易くおぼへよき様に^{じが}尔雅にならひて輯め訳したる書なり

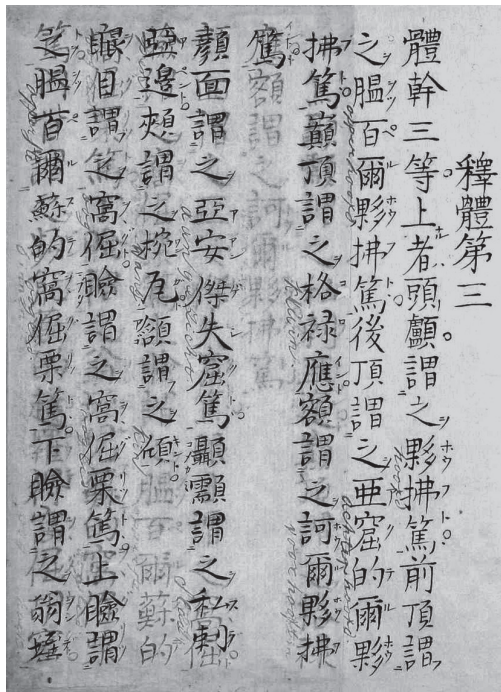
この記述から、『西洋医言』に関する重要な情報がいくつか得られる。まず、この本は「紅毛の医書をよみ習ふ社中の初学に便するか為に」編まれたということである。当時はまだ『波留麻和解』や『類聚紅毛語訳』のような辞書や単語集が全く出版されていなかったため、蘭医学を志す初学者にはオランダ語の基礎的な語彙を身につけるためにこのような本が必要であると考えたのであろう。次の「病名薬名鳥獸草木等より一切医事にあづかる蘭語を」というところからは、これが蘭学の医学関係書を読むために編まれた本であることが改めて確認されるが、『西洋医言』には必ずしも医学関係とは言えないような語も多く含まれているため、本文だけを見ているとそのような目的があまり感じられない。それゆえこの記述は、『西洋医言』という本の性質を考える上で重要である。最後の「誦易くおぼへよき様に^{じが}尔雅にならひて輯め訳したる書なり」というところからは、この本が(語を検索するためではなく)単語を暗記するために編まれたことがまず確認されるが、「^{じが}尔雅」、すなわち中国最古の字書である『爾雅』(著者不明、前漢以前に成立)に倣って編んだことも明言している。「釈○」という部名のあり方からもそのことは想像され、岡島馴の序文にもその旨が記されているが、この「著述書目」にも明記されている。

5.2.2. 早大本と杏雨書屋本に見られる本文修正のための「貼り紙」や「白墨」

早大本と杏雨書屋本には、本文修正のために貼られた「貼り紙」が数多く見られる。本稿でいう「貼り紙」とは、一度完成した本文の上に、修正箇所大きさに切った紙を貼り付け、その上に修正後の本文を記した紙のことをさすが、他の写本において同様の貼り紙による修正は見られない。

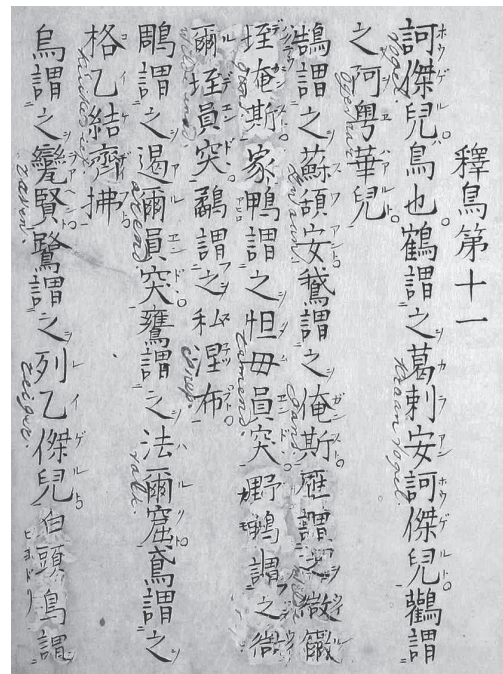
早大本と杏雨書屋本は半丁に記される行数と文字数が同一であり、貼り紙による修正箇所も両者で共通していることが多いが、杏雨書屋本の方が貼り紙の箇所が少ない。しかしそれは、杏雨書屋本の方が修正箇所が少なかったということではなく、後に詳しく見る通り、もともとは同じ箇所と同様の貼り紙修正がなされていたものが、杏雨書屋本ではいくつかの貼り紙が脱落して失われたものと見られる。それを裏付けるように、中には一度脱落した貼り紙が不適切な場所に貼られている箇所も見られる（後掲表8備考欄参照）。それゆえ杏雨書屋本の本文は一貫性を欠いており、それだけでは扱いの難しい本文となってしまう。

この「貼り紙」には、数行にわたって貼られている「長文の貼り紙」（図版6）と、一行以内の少ない文字数に対して貼られている「語句の貼り紙」（後掲図版10参照）が存在し、それぞれ修正の時期や意味合いが異なるものと見られるので、両者は区別して扱われる必要がある（後述）。



図版6 「長文の貼り紙」による修正の例
（早大本『西洋医言』上6才<釈体>冒頭）

※4~9行目に貼り紙。その下にある改訂前の本文が透けて見える。



図版7 「白墨」による修正の例

（早大本『西洋医言』中9才<釈鳥>冒頭）

※4行目「鵠」「雁」、5行目「家鴨」「野鴨」、9行目「白頭鳥」などは白墨の上で書かれている。

また、早大本と杏雨書屋本には、本文の上に「白墨」を塗って、その上に本文を新たに書き加えている箇所もある（図版7）。この「白墨」による修正も、多くは早大本と杏雨書屋本とで共通の箇所に見られるが、杏雨書屋本の方がその数は少ない（後掲表5・7参照）。

「貼り紙」や「白墨」による本文修正は、早大本と杏雨書屋本とで概ね共通しているため、両者とも本自体は大規模な本文改訂が行われる前から存在しており、その本文改訂が行われるに際してほぼ同時に「長文の貼り紙」による本文修正やそれに伴う修正が行われたものと見られる。ただし、後に見るように、本自体の成立は早大本の方が先で、本文の修正も先に早大本で加えられた後に杏雨書屋本に反映された様子が窺える。また、これも後述するが、早大本には、杏雨書屋本にもその他の伝本にも見られない最終段階での修正も含まれているので、早大本の方が玄随による『西洋医言』の最終形態を備えているものと考えられる。

5.2.3. 筆記体アルファベットによる朱書の蘭語綴り

早大本では筆記体アルファベットによる朱書の蘭語綴りが音訳漢字による蘭語表記の左側に併記されているが、杏雨書屋本にはそれが無い（前掲図版1・2参照）。寛政十年序刊の『類聚紅毛語訳』がそうであったように、寛政年間ではまだ出版物にアルファベット表記を入れるのが困難であったためかと想像されるが、その当否はさておき、出版を意図した草稿本と思しき杏雨書屋本ではアルファベット綴りが記されていない。このことは早大本と杏雨書屋本の大きな相違点であるが、早大本が玄随の手元に置かれてのちのちまで改訂され続けた本であるのに対し、杏雨書屋本が出版のための草稿本であったという性格の相違のあらわれとも言えよう^{注2}。

早大本のアルファベット綴りは、「貼り紙」や「白墨」による本文訂正が行われる前から存在していた。それは「貼り紙」や「白墨」の下の本文にも朱書きのアルファベット綴りが添えられていることからわかる。そのことから、出版のための草稿本と見られる杏雨書屋本には、最初から敢えてアルファベット綴りが記されなかったことが改めて窺える。

6. 稲垣文庫本『西洋医言』

続いて稲垣文庫本について見ていく。

津市図書館稲垣文庫は、伊勢商人で天文・暦算・地理学者であった稲垣定毅（1764-1835）の旧蔵書である。2001年に発行された『稲垣文庫仮目録』により、稲垣文庫本『西洋医言』の存在も知られるようになった。中川豊2017によれば、稲垣文庫の蔵書は平成五（1993）年頃に海野一隆氏に見い出され、平成八年九月に津市図書館への第一次寄贈が行われた。『稲垣文庫仮目録』はその第一次寄贈分の仮目録であるが、その中に『西洋医言』も含まれている。（なお、同論文において稲垣文庫本『西洋医言』は、書写年月日不明とされている。）

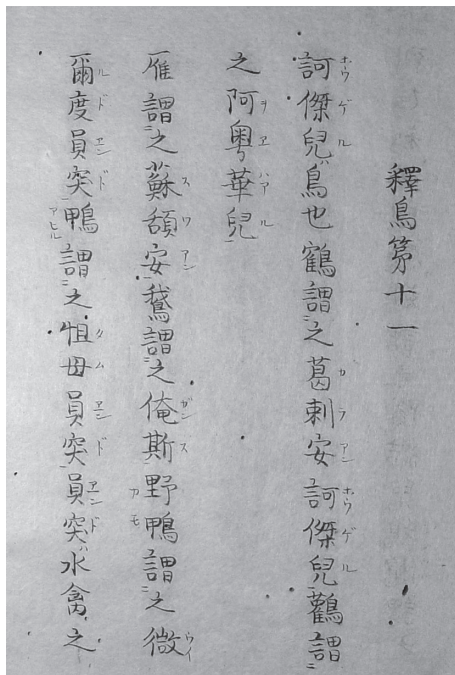
この本は改訂前の本文を備えるという特徴を持つが、その他にも他本と異なる特徴がある。

まず、稲垣文庫本には序文が一つしかない。早大本をはじめとする他本（巻中のみ現存の宛理堂文庫本を除く）では、上巻冒頭に越融による「西洋醫言叙」と岡島馴による「西洋醫言序」の二つの序文があるが、稲垣文庫本には前者しか存在せず、後者は収録されていない。

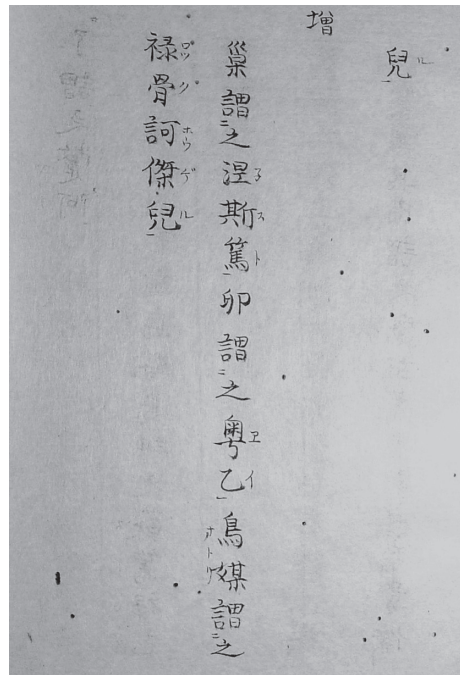
次に、本文冒頭に校者の名前が記されていない。早大本・杏雨書屋本・東大医図本・東大総図本では、各巻の本文冒頭に「東海 宇晉明卿撰／福山 田綱叔紀校」とあるが、稲垣文庫本では三巻とも「東海 宇晉明卿撰」とあるのみで、「福山 田綱叔紀校」の文字は記されていない。この点は宛理堂文庫本とも共通しているが、理由は不明である。一つの推測として、改訂前の本文には「福山 田綱叔紀校」が入っておらず、改訂後に入れられた可能性が考えられるが、その場合は田綱叔紀が校閲をしたことにより本文改訂が行われたと見ることができる。ただ、現状において、そのように考えるのに十分な証拠があるとは言えない。

6.1. 稲垣文庫本の本文

稲垣文庫本の本文は、他本に全く見られない特異な本文となっている。その特徴を一言で言えば、「改訂前の本によって一通り書写した後、改訂後の本を参照することにより、改訂



図版8 稲垣文庫本『西洋医言』<釈鳥>冒頭
※改訂前の本文となっている。4～5行目「雁」「野鴨」「鴨」「水禽」は、早大本・杏雨書屋本において「鵠」「雁」「家鴨」「野鴨」と白墨修正。



図版9 稲垣文庫本『西洋医言』<釈鳥>末尾
※早大本で<釈鳥>末尾にある44「巢」45「卵」46「鳥媒」は、稲垣文庫本では末尾の「増」に入っており、改訂後に増補されたことがわかる。

後に増補された語を各部の末尾に書き加えた本」ということになる。改訂後に増補された語は、各部の末尾に「増」として記される（図版8・9、詳細は後述）。

前述したように、この本の価値は改訂前の『西洋医言』の本文を容易に見ることができることにある。早大本や杏雨書屋本の本文について、「貼り紙」や「白墨」の下にある本文を透かして見るなどして稲垣文庫本の本文と比較してみると、ほぼ稲垣文庫本の（増補部分以外の）本文と一致する。そして、この本と早大本・杏雨書屋本とを対照させて分析してみると、多数存在する「貼り紙」や「白墨」等による修正の理由が見えてくる。

ただし、返り点・読み仮名・送り仮名等の細かい点においては、早大本や杏雨書屋本と異なる箇所が多く、その意味では玄随が著した本文を忠実に書写した本とは言えない。当面参考になるのは、改訂前の語順や漢字表記がいかなるものであったかということである。

稲垣文庫本の本文は每半丁五行・毎行十六字となっている。これは、每半丁九行・毎行十六字となっている早大本・杏雨書屋本・東大医図本に対して、半丁あたりの行数が四行少ないことになる。しかし、毎行十六字という点は同じであるので、対応する行がわかれば容易に対照できる。このことは、早大本や杏雨書屋本において「貼り紙」や「白墨」の下に書かれている文字を判読する際に都合が良い。

6.2. 稲垣文庫本の「増」（改訂後本文の増補語）

稲垣文庫本の「増」（各部末尾に収録されている改訂後本文の増補語）は巻中のみに見られる。多くの場合、「増」の字の後に改訂後本文の増補語が示されるが、〈積木〉〈積天〉〈積地〉では「増」と書かれていない。しかし、早大本と比較すると、やはり改訂後に増補された語が各部の末尾に集められているので、事実上の「増」であるものと判断される。

その部分も含めて、以下に稲垣文庫本の「増」に含まれている語を列挙する。（早大本の改訂後本文の通し番号を付し、早大本の改訂後本文に無い語は「 」内に記す。）

なお、これ以降の論述や表において、煩雑になるのを避けるため、訳語のルビについては基本的に省略した。一方、蘭語の音訳漢字（外国地名を含む）については基本的に原文のルビを入れたが、図版のキャプションや表ではルビを省略した。

〈積草〉：18蠶豆・28敗醬・27延胡索・54紅花・64兔葵・65山慈姑・96羊蹄・98白兔藿・99篋麻・100巴豆・101馬兜鈴・102金剛刺・103連錢草・104錦荔支・105鳳仙花・107斛草。〈積木〉：「牡荊」・44鐵蕉。〈積虫〉：なし。〈積魚〉：17鯪魚・28鱔・29鱗・30魚骨・31介甲・32螺屬。〈積鳥〉：44巢・45卵・46鳥媒。〈積獸〉：26守狗・27盧・43靈貓・44狐・45狸・46角・47爪・48足・49毛・50尾。〈積天〉：92黃道。〈積地〉：46地度・47地方・129天下。

これらが稲垣本の「増」に記されている増補語であるが、早大本と対照させると、上記に含まれていない増補語がいくつか存在することに気付く。それらを以下に挙げる。

〈積体〉：110皴・111手文、〈積草〉：77苘蒿・106浮萍、〈積獸〉：23駝、〈積天〉：

87日食・88月食、〈積地〉：16港・25洪水・26地震・80・87～97・108～110・116～118・123～128の地名、〈積器〉：75乾酪。

〈積草〉106浮萍や〈積天〉87日食・88月食などは単なる書き漏らしのようにも思われるが、〈積体〉110皴・111手文などは増補時期が若干遅かった可能性がある（後掲表3参照）。

6.3. 早大本・杏雨書屋本における本文修正の方法と稲垣文庫本を用いた修正時期の分析

稲垣文庫本が大規模改訂前の本文と改訂後の増補語の双方を備えていることを利用して、早大本や杏雨書屋本において施されている様々な本文修正について以下に分析する。

早大本と杏雨書屋本では共通の箇所ではほぼ同様の本文修正が施されているが、それには四つの修正方法が存在する。本研究ではそれらを①「語句の貼り紙」による本文修正、②「長文の貼り紙」による本文修正、③「空所」への追加記入、④「白墨」による本文修正と呼び分けることにする。修正が行われた時期は、①～③に限れば①「語句の貼り紙」が最も早く、それらは大規模な本文改訂が行われる前に施されたものと見られる。②「長文の貼り紙」と③「空所」への追加記入は大規模改訂時の主たる修正方法であり、相互に関係していることが多いので、ほぼ同時期に行われたものと見られる。一方、④「白墨」による本文修正は、①よりも早い時期の修正と見られるものから②や③の修正が行われた後しばらく経ってからのものまで、幅広い時期にわたる修正が含まれているので、特に注意が必要である。

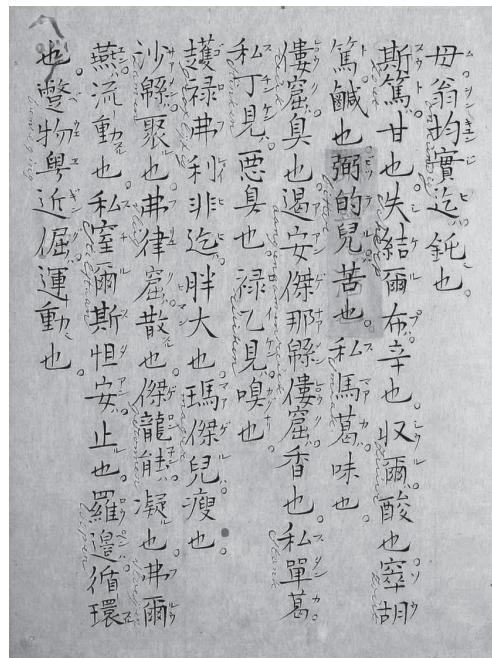
6.3.1. 本文修正の方法①「語句の貼り紙」

による本文修正

「語句の貼り紙」とは、一行より短い数文字単位での貼り紙による修正をさす（図版10）。表2にそれが見られる箇所をまとめた。（ただし訳語部分に限る。これら以外に蘭語部分に対する「語句の貼り紙」が数箇所存在する。「」内が貼り紙修正前の表記であるが、それらは原本で袋綴の内側から見ることにより確認した。）

なお、早大本で「語句の貼り紙」によって修正されている箇所は、杏雨書屋本では全て「白墨」によって同様に修正されている。

これらの箇所について稲垣文庫本と見比べてみると、後に見る「長文の貼り紙」（数行～半丁にわたる貼り紙）とは異なり、稲



図版10 「語句の貼り紙」による修正の例
（早大本『西洋医言』下13才）

※3行目の「彌的兒。苦也。」が貼り紙修正。

表2 早大本と杏雨書屋本とで「語句の貼り紙」による本文修正がある箇所（訳語部分のみ）

部名	所在	早大本 「語句の貼り紙」による修正	杏雨書屋本の該当箇所 ※全て「白墨」で修正されている。	稲垣文庫本での該当箇所
1. 積病	上1ウ	「癰疔」→13黴瘡	「癰疔」→13黴瘡	13黴瘡（貼り紙なし）
15. 積器	下3ウ	「高脚盃」→80九飲器	「高脚盃」→80九飲器	80九飲器（貼り紙なし）
	下3ウ	「杓」→92瓶	「杓」→92瓶	92瓶（貼り紙なし）
18. 積言	下13オ	「瀟」→75苦	「瀟」→75苦	75苦（貼り紙なし）
19. 積辞	下19オ	「能」→64能（蘭語の変更）	「能」→64能（蘭語の変更）	64能（貼り紙なし）

垣文庫本では全て、最初から修正後の状態で書写されている。改訂前の本文である稲垣文庫本においてすでに修正後となっているため、「語句の貼り紙」は大規模改訂よりも前に施されたものと考えられる。

6.3.2. 本文修正の方法②「長文の貼り紙」による本文修正

これに対し、「長文の貼り紙」は数行～半丁にわたる貼り紙であるが、巻上の〈積体〉〈積骨〉、巻中の〈積草〉〈積獣〉〈積天〉〈積地〉に見られ、巻下には見られない。表3に早大本における「長文の貼り紙」の箇所をまとめ、それぞれの「長文の貼り紙」の目的を備考欄に記しておいたが、稲垣文庫本の本文は全て「長文の貼り紙」による修正がなされる前、すなわち「長文の貼り紙」の下の本文と一致している。このことにより、「長文の貼り紙」の貼られる前を「改訂前」の本文、「長文の貼り紙」の貼られた後を「改訂後」の本文と呼ぶのであるが、その改訂の目的は「語の増補」「語の削除」「語順の変更」ということに行き着く。〈積体〉の場合、ほぼ全体に「長文の貼り紙」による本文修正が施されているが、語の増補や削除は行われておらず、ひとえに語順の変更をするための貼り紙と見られる。一方、〈積地〉では収録語そのものが激しく変更されている。その内容についてここでは細かく分析しないが、削除された地名と増補された地名がそれぞれ相当数にのぼる。

6.3.3. 本文修正の方法③「空所」への追加記入

「空所」への追加記入についてはこれまで述べてこなかったので、ここで詳しく説明する。

早大本と杏雨書屋本では、改訂を加える際に葉数を増やすことはせず、もともとの葉数の範囲内でやりくりしている。そのため、改訂によって記述を増補する際には、改訂前の本文に「空所」があればそこに新たな文章や語を追加して記入するという方法を取っている。

その「空所」の大半は、各部の末尾である。『西洋医言』の本文は、改訂前の時点から、次の部の記述に移る際に次の丁の一行目、もしくは次の半丁の一行目から始めている。それゆえ、各部の末尾は数行空いていることが多かった。そこへ改訂時に追加記入したものと見られる（図版11）。

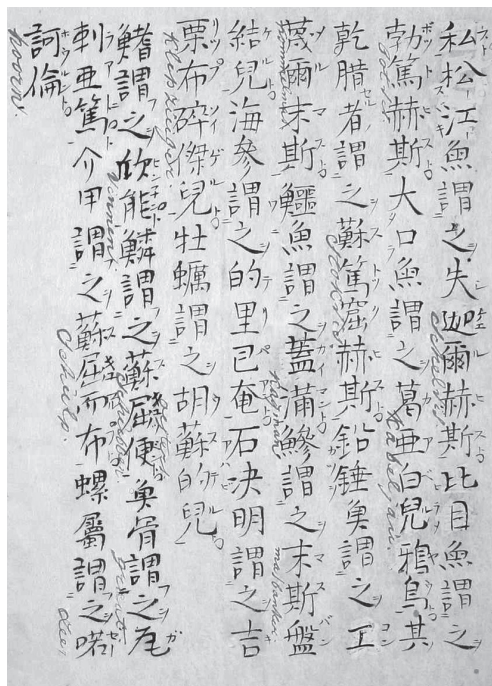
表3 早大本で「長文の貼り紙」による本文修正がある箇所

部名と改訂後の語数	早大本 「長文の貼り紙」の位置 ※改訂後本文の通し番号と、丁 付け・行数によりで記す。	早大本 「長文の貼り紙」の下の語 ※稲垣文庫本も参照。早大本改 訂後本文の通し番号で記す。 「」内の語は削除された語。	備考 (貼り紙による修正の目的など)
3. 釈体 (111語)	1-3 (貼り紙ナシ)		<釈体>の貼り紙は、語の掲出順を並び替えるためのものと見られる。例えば改訂前は3「後頂」と4「巔頂」の間にあった7「顛顛」を、6「顔面」の後に移動するような類である。最後の110「皴」・111「手文」は杏雨書屋本や稲垣文庫本に見られないが、早大本では貼り紙の下にも見られるので、貼り紙をする前に増補されたのであろう。
	4-13 (貼り紙上6オ4～9行目)	7・4-6・10-14	
	14-26 (貼り紙上6ウ全行)	15-17・20・18・19・8・35・36・44・45・21-24	
	27-40 (貼り紙上7オ全行)	25-34・37-40	
	41-54 (貼り紙上7ウ全行)	41・42・9・46・43・47-57	
	55-70 (貼り紙上8オ全行)	58-71	
	71-83 (貼り紙上8ウ全行)	72-77・81-86	
	84-94 (貼り紙上9オ全行)	87-104	
	95-111 (貼り紙上9ウ全行)	105-109・78-80・110・111	
4. 釈骨 (55語)	1-43 (貼り紙ナシ)		<釈骨>の貼り紙は、45「下端ハ内踝」と47「下端ハ外踝」の前に、それぞれ「其ノ」を入れるためだけのものと見られる。
	44-46 (貼り紙上12オ8～9行目)	44-46	
	47-55 (貼り紙上12ウ全行)	47-55	
7. 釈草 (109語)	1-91 (貼り紙ナシ)		<釈草>の貼り紙は、96・98-109を増補するために、<釈草>末尾にあった「根」「莖」「枝」「葉」「花」「種子」「莢」の7語を<釈木>末尾に移動させるためのもの。
	92-96 (貼り紙中4オ7～9行目)	95・97・92-94	
	97-109 (貼り紙中4ウ全行)	<釈木>の54-60	
12. 釈獸 (50語)	1-4 (貼り紙ナシ)		「象骨」を削除するための貼り紙。
	5-9 (貼り紙中10ウ4～6行目)	「象骨」・5-9	
	10-23 (貼り紙ナシ)		
	24-29 (貼り紙中11オ5～7行目)	24・25・28・29・42	
	30-50 (貼り紙ナシ)		
13. 釈天 (97語)	1-85 (貼り紙ナシ)		「氣候」を削除して87「日食」・88「月食」を増補するための貼り紙。
	86-97 (貼り紙中14ウ2行目11文字目～9行目)	86・89-91・「氣候」・93-97	
14. 釈地 (129語)	1-24 (貼り紙ナシ)		「海港」を削除して25「洪水」・26「地震」を増補するための貼り紙。
	25-39 (貼り紙中15ウ2～9行目)	「海港」・27-39	
	41-58 (貼り紙中16オ2～9行目)	40-45・48・49・51・50・52・「南亞墨利加」・53・54・「回回」・55-57	
	59-94 (貼り紙16ウ全行)	58-65・75-77・「亜勒馬尼亞」・79・81・82・「大尼亞」・83-86・98-104・「西爾得」・105・「井巴」・「福島」・106「意勒納島」・107	
	95-119 (貼り紙17オ全行)	111・112・「知加」・113-115・「花地」・「新拂郎察」・「拔革老」・「農地」・「寄來利」・「新亞比俺」・119・その他海の名称多数(改訂に伴い削除)	
	120-129 (貼り紙17ウ1～8行目)	122・その他海の名称多数(改訂に伴い削除)・46・47・129	

しかし、それ以外にも、本文の改行により生じた「空所」に追加記入したと見られる箇所が存在する（後掲図版13参照）。表4^{注3}に「空所」への追加記入をまとめた。

「空所」への追加記入は、墨付きの度合いや字の形が周囲の文字と異なることが多く、そのことから後で追加記入されたことがわかる。また、早大本と杏雨書屋本とでは若干記述が異なる箇所もある。（＜積魚＞32番の表記、＜積獸＞23番の有無、同42・43番の語順など。）

早大本と杏雨書屋本における「空所」への追加記入の相違に着目してみると、両者の関係がよくわかる箇所がある。例えば＜積草＞の18「蠶豆」の追加記入に着目すると、稲垣文庫本に



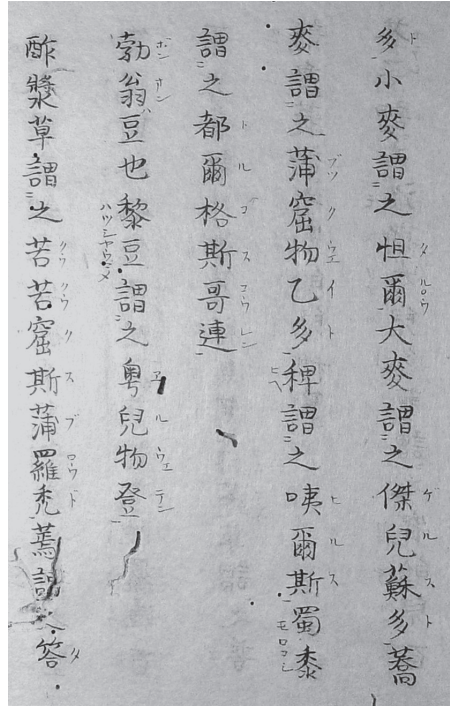
図版11 早大本『西洋医言』＜積魚＞末尾

※最後の3行、すなわち28「鱈」29「鱗」30「魚骨」31「介甲」32「螺屬」は改訂時に追加されたと見られる。墨付きや字の形が異なる。

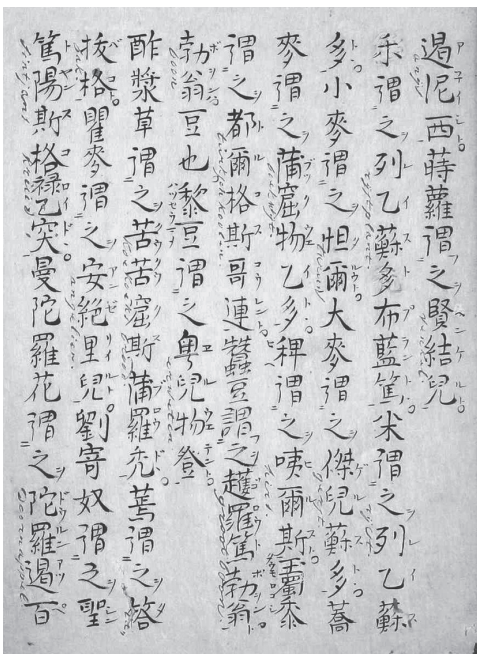
表4 早大本と杏雨書屋本とで「空所」への追加記入がある箇所（訳語部分のみ）

部名	所在	早大本 「空所」への追加記入による 修正箇所	杏雨書屋本 「空所」への追加記入による 修正箇所	稲垣文庫本での該当箇所
7. 積草	中1ウ	18蠶豆（改行箇所）	18蠶豆（改行箇所）	「増」にあり
	中3オ	64兎葵・65山慈姑（改行箇所）	64兎葵・65山慈姑（改行箇所）	「増」にあり
8. 積木	中6ウ	54根・55莖・56枝・57葉・58花・59種子・60莢（末尾）	54根・55莖・56枝・57葉・58花・59種子・60莢（末尾）	ナシ（＜積草＞にあり）
10. 積魚	中8ウ	28鱈・29鱗・30魚骨・31介甲・32螺屬（末尾）	28鱈・29鱗・30魚骨・31介甲・32螺屬（末尾）	「増」にあり（32は「螺屬」）
11. 積鳥	中10オ	44巢・45卵・46鳥媒（末尾）	44巢・45卵・46鳥媒（末尾）	「増」にあり
12. 積獸	中11オ	23駝（改行箇所）（下記参照）	ナシ（下記参照）	ナシ
	中11ウ	42猫・43靈猫・44狐・45狸・46角・47爪・48足・49毛・50尾（末尾） ※この追加記入は2回に分けて行われた。1回目では42-45と23駝が追加記入されたが、2回目の際に末尾の23駝を白墨で消去し、それを11オ4行目の改行による空所へ移動（追加記入）し、その白墨の上に46角が、続いて残りの空所に47-50が追加記入された。	43靈猫・42猫・44狐・45狸・46角・47爪・48足・49毛・50尾（末尾） ※43・42の語順が早大本と逆で、左記の23駝の白墨修正は見られない。早大本の2回目の追加記入がなされた後にまとめて杏雨書屋本に追加記入された一方で、中11オへの23駝の記入が忘れられたのであろう。	「増」にあり（ただし42猫は29拂林狗と30鼠の間にあり）
14. 積地	中16オ	40十字街（改行箇所）	ナシ（次の行の行頭にあり）	次の行の行頭にあり

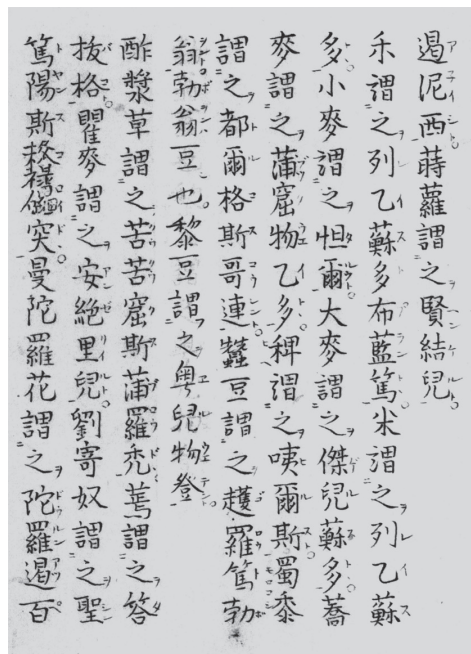
においてこの位置は改行による空所となっており(図版12)、「蠶豆」は末尾の「増」に入っている(図版12)ので、改訂後に増補された語であることがわかる。早大本の該当箇所を見ると、周囲の字と少し違った字で書かれているように見え、本来8文字しか入らないところに9文字で書いているので、若干窮屈そうに見える(図版13)。一方、杏雨書屋本ではその窮屈さが感じられず、字も整っている(図版14)。しかしよく見ると、杏雨書屋本では追加記入の9文字目「翁」を次の行に送っており、次の行全体に対して貼り紙修正することにより調整していることがわかる。このことから、早大本で先に修正が行われ、それに基づいて杏雨書屋本の修正作業が行われたことが察せられる。



図版12 稲垣文庫本『西洋医言』〈积草〉
※3行目の下半分が「空所」となっており、「蠶豆」の語が無い。



図版13 早大本『西洋医言』〈积草〉中1ウ
※5行目の下半分、「蠶豆」以下が追加記入。「翁」の字が一番下に来ていることに注目。



図版14 杏雨書屋本『西洋医言』〈积草〉
※5行目の下半分が追加記入。「翁」の字は6行目に送っている。6行目は全体が貼り紙による修正。

6.3.4. 本文修正の方法④「白墨」による本文修正

最後に「白墨」による本文修正であるが、この修正方法には修正時期の早いものから遅いものまで様々含まれていると見られるので、その段階ごとに見ていく。(ただし、訳語部分に限る。以下の表に示す以外に、蘭語部分に対する「白墨」修正箇所が多数存在する。)

表5に示すのは、修正時期の最も早いグループである。具体的には、稲垣文庫本の本文(増補語部分以外の改訂前本文)において、既に修正後の状態になっている箇所である。

ただし、実際にはその中でも修正時期が二つに分けられる。表5の杏雨書屋本の欄で最初に「(白墨修正ナシ)」と書いてある7語は、杏雨書屋本で「白墨」による修正がなされておらず、最初から早大本の白墨修正後の状態になっているので、格段に早い修正である。それはすなわち、早大本でその7語の修正がなされた後に杏雨書屋本が作られたことを意味する。

一方、それ以外の5語は杏雨書屋本でも早大本と同様の白墨修正が施されているので、杏雨書屋本が作られた後に施された修正であるが、稲垣文庫本では最初から修正後の状態となっているので、大規模な改訂が行われる前に施された修正と見られる。その状況から考えて、これらの5語は、前に示した「語句の貼り紙」と同時期の修正と見ることができる。

表6に示すのは、その次の段階、具体的には大規模な本文改訂が行われた時期に施されたと思われる「白墨」による修正である。表5の語と異なるのは、稲垣文庫本の本文が、早大本や杏雨書屋本で施されている「白墨」による修正より前の状態になっている点である。そのことから考えて、表6の修正は大規模な改訂が行われた際に施されたものと判断した。

なお、稲垣文庫本では、改訂後本文で新たに増補された語を各部末尾の「増」に示すが、

表5 「白墨」による本文修正がある箇所①大規模な本文改訂より前の修正(訳語部分のみ)

部名	所在	早大本 「白墨」による修正箇所 ※「」内の語は削除または修正された語。番号は早大本改訂後本文での通し番号。	杏雨書屋本 「白墨」による修正箇所 ※「」内の語は削除または修正された語。番号は早大本改訂後本文での通し番号。	稲垣文庫本での該当箇所 ※早大本の修正前の表記と一致する場合は「」内に記す。改訂後の表記と一致する場合は早大本改訂後本文での通し番号を付す。
2. 積人	上5オ	「小兒」→34少年	「小兒」→34小年(ママ)	34小年(ママ)
4. 積骨	上11オ	「胸…軋焉」→22胸…湊焉	(白墨修正ナシ) 22胸…湊焉	22胸…湊焉
7. 積草	中1ウ	「稻」→11禾	(白墨修正ナシ) 11禾	17禾
	中4オ	「七葉一枝草」→90七葉一枝花	「七葉一枝草」→90七葉一枝花	90七葉一枝花
15. 積器	下3オ	「蒲桃酒」→73麥酒・74酪	「蒲桃酒」→73麥酒・74酪	73麥酒・74酪
	下3ウ	「釜」→91炭	「釜」→91炭	91炭
	下4オ	「磁石石」→104吸鐵石	(白墨修正ナシ) 104吸鐵石	104吸鐵石
	下4オ	「日合儀」→106日晷儀	(白墨修正ナシ) 106日晷儀	106日晷儀
	下4オ	「鏡有縮廣攝退…」→109鏡有攝退縮廣…」	(白墨修正ナシ) 109鏡有攝退縮廣…」	109鏡有攝退縮廣…」
	下5オ	「穀」→129其穀	「穀」→129其穀	129其穀
16. 積宮	下7オ	「棟梁」→5棟材	(白墨修正ナシ) 5棟材	5棟材
18. 積言	下15オ	「誦」→150讀	(白墨修正ナシ) 150讀	150讀

表6 「白墨」による本文修正がある箇所②大規模な本文改訂時の修正（訳語部分のみ）

部名	所在	早大本 「白墨」による修正箇所 ※「」内の語は削除または修正された語。番号は早大本改訂後本文での通し番号。	杏雨書屋本 「白墨」による修正箇所 ※「」内の語は削除または修正された語。番号は早大本改訂後本文での通し番号。	稲垣文庫本での該当箇所 ※早大本の修正前の表記と一致する場合は「」内に記す。修正後の表記と一致する場合は早大本改訂後本文での通し番号を付す。
2. 積人	上5ウ	「井匠」→52泥水匠	「井匠」→52泥水匠	「井匠」
7. 積草	中2オ	「萍蓬草」(改訂後は108) → 27延胡索	「萍蓬草」(改訂後は108) → 27延胡索	「萍蓬草」(増27延胡索)
	中2オ	「菱」(改訂後は109) → 28敗醬	「菱」(改訂後は109) → 28敗醬	「菱」(増28敗醬)
	中3オ	「菊花」→54紅花	「菊花」→54紅花	「菊花」(増54紅花)
	中3オ	「蓮」・「澤泻」→66水慈姑	「蓮」・「澤泻」→66水慈姑	「蓮」・「澤泻」(傍記:「水慈姑トモ」)
	中3ウ	「欸冬」→77苘蒿	「欸冬」→77苘蒿	「欸冬」
8. 積木	中6オ	「蔓荊子」→31金鐘花 ※頭注に「出葉性要畧即牡荊」(墨書)とある。	「蔓荊子」→31金鐘花 ※早大本と同様の墨書頭注があるが、白墨で消去。	「蔓荊子」(増牡荊) ※増補語の「牡荊」は早大本の頭注に見られるが、関係は不明。
	中6ウ	「芭蕉」→44鐵蕉	「芭蕉」→44鐵蕉	「芭蕉」(増44鐵蕉)
10. 積魚	中8オ	「鮫」→6沙鮫	「鮫」→6沙鮫	「鮫」
	中8オ	「鱠殘魚」→9鯨魚	「鱠殘魚」→9鯨魚	「鱠殘魚」
	中8ウ	「鱸魚」→18松江魚	「鱸魚」→18松江魚	「鱸魚」
	中8ウ	「王餘魚」→19比目魚	「王餘魚」→19比目魚	「王餘魚」
11. 積鳥	中9オ	「雁」(改訂後は6) →4鶺鴒	「雁」(改訂後は6) →4鶺鴒	「雁」
	中9オ	「野鴨」(改訂後は8) →6雁	「野鴨」(改訂後は8) →6雁	「野鴨」
	中9オ	「鴨」→7家鴨	「鴨」→7家鴨	「鴨」
	中9オ	「水禽」→8野鴨	「水禽」→8野鴨	「水禽」
	中9オ	「朱鷺」→15白頭鳥	「朱鷺」→15白頭鳥	「朱鷺」
15. 積器	下3オ	「麴」→75乾酪	「麴」→75乾酪	「麴」

増補されたのではなく単に訳語のみが変更された箇所については、その変更を反映させず、変更前の訳語のみを示すという方針が取られているので、注意を要する。

最後に示す表7は、表6よりも後と見られる修正である。具体的には、早大本において「白墨」による修正が施されているが、杏雨書屋ではそれが施されていない状態となっている語である。ただ、表7に示した3語は、それぞれ事情が異なるようにも思われる。

<積魚>の「泥鯱」→17鯪魚は、杏雨書屋本において「白墨」による修正が施されていないものの、稲垣文庫本では「増」に「鯪魚」が示されているので、単に修正し忘れただけのようにも思われる。一方、<積草>の「蜀黍」→17玉蜀黍は、杏雨書屋本において朱書の頭注で「玉」を入れるように指示され、左ルビの「モロコシ」の上に朱で「タウ」と書き入れられている。このような方法による修正は、杏雨書屋本において他に二例しか見られない珍しいもので、恐らくはかなり後になってからの修正と見られる。それを裏付けるように、改訂後本文の写本である究理堂文庫本では、この箇所のみ修正前の「蜀黍」となっている。

表7 「白墨」による本文修正がある箇所③大規模な本文改訂より後の修正（訳語部分のみ）

部名	所在	早大本 「白墨」による修正箇所	杏雨書屋本 「白墨」による修正箇所	稲垣文庫本での該当箇所
7. 枳草	中1ウ	「蜀黍」→17玉蜀黍	「蜀黍」（白墨修正ナシ、ただし朱書頭注で「玉」を補入）	「蜀黍」
8. 枳木	中5オ	「月桂」→6天竺桂	「月桂」（白墨修正ナシ）	「月桂」
10. 枳魚	中8オ	「泥鰍」→17鯰魚	「泥鰍」（白墨修正ナシ）	「泥鰍」（ <small>増</small> 17鯰魚）

＜枳木＞の「月桂」→6天竺桂も、杏雨書屋本では「白墨」で修正した形跡が見られないが、究理堂文庫本ではこの語の見出し語そのものが欠落しており、上のような判断ができない。（なお、東大医図本・東大総図本では修正後の「玉蜀黍」「天竺桂」となっている。）

6.3.5. 修正の方法が組み合わされている箇所の具体例

以上見てきたような修正の方法が複数組み合わされている箇所について、＜枳草＞と＜枳木＞で見られる例を以下に示す。

＜枳草＞はもともと、改訂後の27番に相当する位置に「萍蓬草」が、改訂後の28番に相当する位置に「菱」があったが、ともに「白墨」によって消され、その上に「延胡索」と「敗醬」が書かれて改訂後の27番と28番になった。

ただし、消された「萍蓬草」と「菱」は、＜枳草＞の最後にまわされて、改訂後の108番と109番になった。この時、改訂前の本文には無かった96・98～107番の植物名も同時に＜枳草＞の末尾に増補されたが、もともと＜枳草＞末尾にはそれだけの語数を入れるスペースが存在しなかった。そこで、改訂前に＜枳草＞末尾にあった「根」「莖」「枝」「葉」「花」「種子」「莢」の7語を、＜枳木＞の末尾に移動した。（＜枳木＞末尾にはこの7語を追加記入する「空所」があった。）＜枳草＞の末尾に見られる92番～109番の「長文の貼り紙」はつまり、「根」「莖」「枝」「葉」「花」「種子」「莢」の7語を＜枳草＞から消して、96・98～107番の植物名を増補し、なおかつ27「延胡索」と28「敗醬」の挿入により一旦は消された108「萍蓬草」と109「菱」を末尾に加えるための貼り紙と解される。これらはすなわち、「白墨」による本文修正と「長文の貼り紙」による本文修正、「空所」への追加記入が一連の改訂作業として同時に行われたことを示している。

6.4. 早大本との比較によってわかる杏雨書屋本の「長文の貼り紙」の脱落

しかし、杏雨書屋本で上記のことを確かめてみると、＜枳草＞27・28番の「白墨」による修正は見られるが、＜枳草＞には「長文の貼り紙」が全く貼られていない。（後掲表8参照。）よって、杏雨書屋本の＜枳草＞は、「白墨」による修正箇所のみが改訂後であるのに対し、「長文の貼り紙」の箇所は改訂前となっており、末尾に「根」「莖」「枝」「葉」「花」「種子」「莢」の7語が残ったままとなっている。その一方で、＜枳木＞の末尾にもこれらの7語が書き加

表8 早大本と杏雨書屋本における「長文の貼り紙」のある箇所と比較

部名と改訂後の語数	早大本 「長文の貼り紙」の位置	杏雨書屋本 「長文の貼り紙」の位置	備考
3. 釈体 (111語)	1-3 (貼り紙ナシ)	<u>1-13</u> (貼り紙上6オ全行、ただし、1~3行目(1~3語目)までは貼り紙前と同内容)	杏雨書屋本の<釈体>の貼り紙は部分的にしか残っていないが、これは、本来早大本と同様に施されていた貼り紙が失われたものと見られる。(貼り跡が残っている。)現存の貼り紙だけでは、一貫した語順変更になり得ない。(なお、杏雨書屋本の改訂前本文では、末尾に110「 <u>斂</u> 」・111「 <u>手文</u> 」が記されていない。)
	<u>4-13</u> (貼り紙上6オ4~9行目)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>14-26</u> (貼り紙上6ウ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>27-40</u> (貼り紙上7オ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>41-54</u> (貼り紙上7ウ全行)	<u>41-54</u> (貼り紙上7ウ全行)	
	<u>55-70</u> (貼り紙上8オ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>71-83</u> (貼り紙上8ウ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>84-94</u> (貼り紙上9オ全行)	<u>84-94</u> (貼り紙上9オ全行)	
<u>95-111</u> (貼り紙上9ウ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)		
4. 釈骨 (55語)	1-43 (貼り紙ナシ)	1-43 (貼り紙ナシ)	<釈骨>は早大本・杏雨書屋本ともに同じ貼り紙訂正がなされている。
	<u>44-46</u> (貼り紙上12オ8~9行目)	<u>44-46</u> (貼り紙上12オ8~9行目)	
	<u>47-55</u> (貼り紙上12ウ全行)	<u>47-55</u> (貼り紙上12ウ全行)	
7. 釈草 (109語)	1-91 (貼り紙ナシ)	1-91 (貼り紙ナシ)	杏雨書屋本の<釈草>には貼り紙が無く、改訂前の本文となっている。したがって、末尾の「 <u>根</u> 」「 <u>莖</u> 」「 <u>枝</u> 」「 <u>葉</u> 」「 <u>花</u> 」「 <u>種子</u> 」「 <u>莢</u> 」は<釈草>に残っている。ところが、<釈木>の末尾には上記7語が追加記入されているので、もともと存在していた<釈草>末尾の貼り紙が失われたものと見られる。
	<u>92-96</u> (貼り紙中4オ7~9行目)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>97-109</u> (貼り紙中4ウ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
8. 釈木 (60語)	(<釈木>に貼り紙ナシ)	<u>14-17</u> (貼り紙中5ウ1~2行目)	杏雨書屋本だけの貼り紙。14「 <u>胡桃</u> 」の蘭語「 <u>揆登</u> 」の前に「 <u>阿結尔</u> 」の3文字を挿入するためのものであるが、早大本では頭注で挿入している。3行目末尾に「 <u>刺奈多</u> 。」と3文字追加記入していることから、3行目1~8文字目にも貼り紙があったものと見られる。
12. 釈獣 (50語)	1-4 (貼り紙ナシ)	1-4 (貼り紙ナシ)	<釈獣>は早大本・杏雨書屋本ともに同様の貼り紙修正がなされている。
	<u>5-9</u> (貼り紙中10ウ4~6行目)	<u>5-9</u> (貼り紙中10ウ4~6行目)	
	10-23 (貼り紙ナシ)	10-23 (貼り紙ナシ)	
	<u>24-29</u> (貼り紙中11オ5~7行目)	<u>24-29</u> (貼り紙中11オ5行目10文字目~7行目、ただし5行目は9文字目まで同内容)	
	30-50 (貼り紙ナシ)	30-50 (貼り紙ナシ)	
13. 釈天 (97語)	1-85 (貼り紙ナシ)	1-85 (貼り紙ナシ)	杏雨書屋本の貼り紙小片4枚のうち、2枚は誤った場所に貼られているが、正しい場所に張りなおしても不完全である。実際にはもう数枚存在していたものと見られる。
	<u>86-97</u> (貼り紙中14ウ2行目11文字目~9行目)	←貼り紙、部分的に残っている。(本来ここにあるべき貼り紙の一部が4枚の小片に分けられ、14ウ~15オに分散して張られている。)	
14. 釈地 (129語)	1-24 (貼り紙ナシ)	1-24 (貼り紙ナシ)	杏雨書屋本には中15ウ・中16オ・中16ウ・中17オの貼り紙が無いが、貼り跡が見られ、中17ウの貼り紙が残っていることから、もともと存在していた中15ウ・中16オ・中16ウ・中17オの貼り紙が失われたものと見られる。
	<u>25-39</u> (貼り紙中15ウ2~9行目)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>41-58</u> (貼り紙中16オ2~9行目)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>59-94</u> (貼り紙中16ウ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>95-119</u> (貼り紙中17オ全行)	←貼り紙ナシ (貼り跡アリ)	
	<u>120-129</u> (貼り紙中17ウ1~8行目)	<u>120-129</u> (貼り紙中17ウ1~8行目)	杏雨書屋本では、中17ウにあるべき貼り紙がすぐ隣の中18オ(すなわち後表紙の裏)に貼られている。

えられており、〈積草〉との整合性が取れていない。これらのことから、もともとは杏雨書屋本の〈積草〉にも「長文の貼り紙」が存在していたが、後に脱落して失われたものと推測される。(原本を手にとって見ると、その貼り跡が確認される。)

表8に、早大本と杏雨書屋本における「長文の貼り紙」のある箇所をまとめておいた。前掲表3・5・6・7も併せて参照すると、早大本と杏雨書屋本では「白墨」による修正や「空所」への追加記入が両者で共通していることが多いが、「長文の貼り紙」による修正については早大本に比べて杏雨書屋本の方が概して少ない。(〈積体〉の一部、〈積草〉、〈積天〉、〈積地〉の一部。) 上に見たような状況から考えて、その少ない「長文の貼り紙」というのは最初から無かったのではなく、ほとんどが脱落して失われたものと解される。

その一方で、杏雨書屋本には早大本に無い「長文の貼り紙」が一枚だけ見られる。それは〈積木〉14「胡桃」の蘭語の前に3文字挿入するための貼り紙で、早大本では頭注で挿入しているが、杏雨書屋本では2行半の貼り紙と3文字の追加記入で対応したものと見られる。

7. その他の写本について

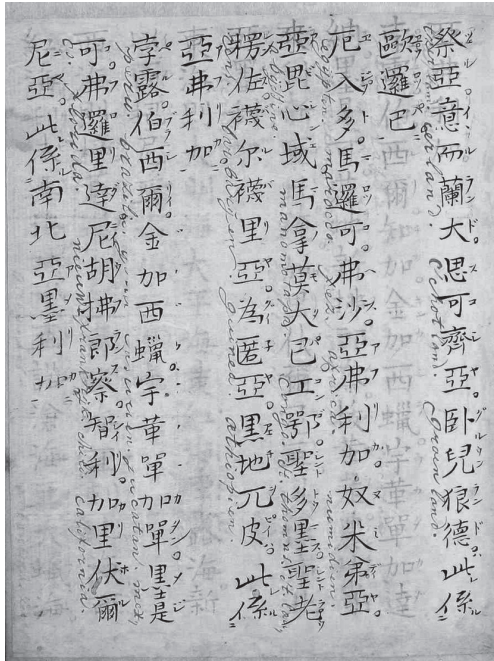
7.1. 東大医図本『西洋医言』

東大医図本は末尾に「石川隣玄徳藏庫」と墨書されているので、江戸在住の医者・石川玄徳^{註4}の旧蔵書であったものと見られる。玄徳は寛政六(1794)年四月末から五月上旬にかけて行われた、江戸参府中の阿蘭陀商館長ヘンミイG. Hemmijら一行との会見に参加しており、その折に江戸の長崎屋で桂川甫周・大槻玄沢・宇田川玄随らと同席している。

この東大医図本は、早大本の改訂後本文の臨模本と呼ぶべき本である。早大本に見られるような「貼り紙」や「白墨」による本文修正は見られないが、二つの序文および本文は一行の文字数や半丁の行数も同一であり、朱書の蘭語表記に至るまで早大本に似せて書写されている。上記の通り、石川玄徳と宇田川玄随が知り合いであったことも考え合わせると、東大医図本は早大本を直接参照して書写された本である可能性が高い。

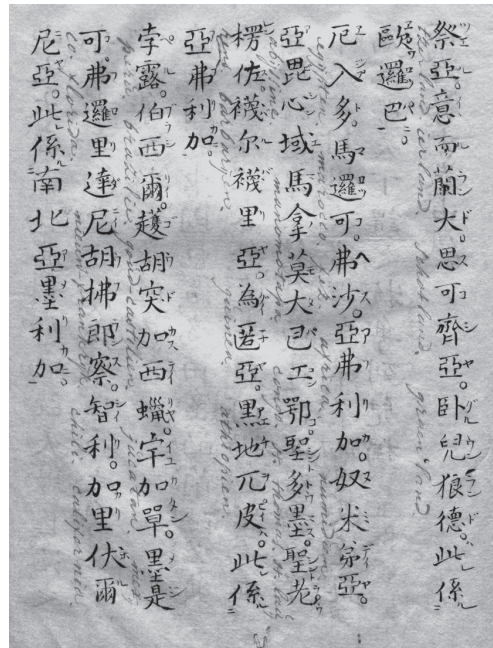
ただ、以下の点のみは早大本と本文が異なる。早大本の〈積地〉113・114番は、その語が含まれる半丁(中17オ)全体に対して「長文の貼り紙」による修正が施されている箇所であるが、113・114番の部分だけその上にさらに「語句の貼り紙」による修正を施して、蘭語がそれぞれ「金加西蠟」「宇革單」となっている。(図版15。このような「長文の貼り紙」の上にさらに「語句の貼り紙」を施して行っている修正を、以下「再修正」と呼ぶことにする。) 一方、東大医図本は、再修正前の「^{ゴウドカステイリヤ} 趨胡突加西蠟」「^{イユカタン} 宇加單」となっている(図版16)。同様に、早大本の〈積地〉121・122番(中17ウ)は再修正により「死海」「氷海及氷^{ゼエ}喏」となっているが、東大医図本は再修正前の「^{ドウデゼエ} 度埵喏」「^{エイ スセエ} 粵乙斯喏」となっている。

これらの再修正は、地名である「^{ゴウドカステイリヤ} 趨胡突加西蠟」「^{ドウデゼエ} 度埵喏」「^{エイ スセエ} 粵乙斯喏」の中の「ゴウド(goud)」「ドウデ(doode)」「エイス(ijs)」を意識して、「金」「死」「氷」という表記に変



図版15 <釈地>の「再修正」の例
(早大本『西洋医言』下17才)

※半丁全体が「長文の貼り紙」による修正箇所。7行目の「金加西蠟。字革單」は再修正の貼り紙。その下の「加單」は本来削除されるべき字。



図版16 <釈地>の「再修正」が施される前
(東大医図本『西洋医言』下17才)

※7行目の「越胡突加西蠟。字革單。」は再修正されていない状態で書写されている。貼り紙は一切されていない。

更したというものである。それにより、<釈地>113番の本文は二文字減ったのであるが、次の114「字革單」まで含めた再修正の貼り紙が短すぎたため、早大本の114番は再修正前の「加單」が余計に見える状態となっており、「字革單加單」と読める状態になっている(図版15)。

上記の箇所の「再修正」は早大本だけに見られるものであり、改訂後の本文となっている東大医図本・究理堂文庫本・東大総図本は全て再修正前の状態になっている。それにより、上記早大本の再修正は、著者の玄随によって最も後に加えられた修正と見られ、上記の三本は全て再修正が加えられる前の状態の本文によって書写されていることがわかる。

7.2. 究理堂文庫本『西洋医言』

究理堂文庫は、京都の医者であった小石元俊(1743-1808)と息子の小石元瑞(1784-1849)の旧蔵書が中心となっている。究理堂とは元俊の医学塾の名である。

究理堂文庫本『西洋医言』は巻中しか現存していないが、表紙右上に朱で「共三」と書かれているので、もともとは巻上・巻下も存していたものと見られる。また、内題の次に記されている著者名は「東海 宇晋明卿撰」のみであり、「福山 田綱叔紀校」の文字が無い(図

版17)。この点は稲垣文庫本と共通するが、本文は改訂後のものとなっており、オランダ語のアルファベット表記も記されている点が稲垣文庫本とは異なる。

究理堂文庫本は他の伝本と異なり、漢文体の本文を解体して見出し語ごとに分けて改行し、アルファベット綴りを各語の下に大きな字で墨書するというレイアウトの変更を独自に行っている。これにより、単語集としては格段に見やすいものになっているが、早大本と比較すると、書写の段階で生じたと見られる誤りがいくつか存在する。

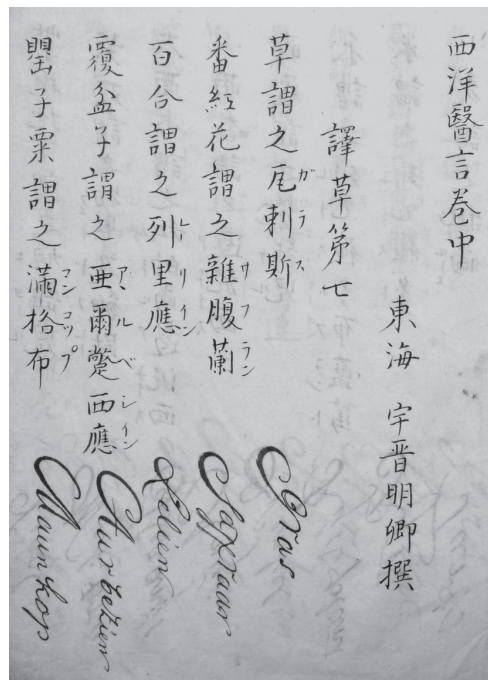
まず、写し落したと見られる語であるが、< 積木 > の6「天竺桂」・7「杏」・8「栗」や、< 積天 > の33「辰宮」が究理堂文庫本には見られない（後掲表9参照）。こ

れらを除外する積極的な理由は見当たらないので、ただ単に写し落しただけのものと思われる。

次に、見出し語順が異なっている箇所が挙げられる。< 積草 > で、早大本では22「蕎」・23「瞿麦」・24「劉奇奴」となっているところが、24・23・22の語順になっている。同様に、< 積天 > で89「北極」・90「南極」・91「赤道」となっているところが89・91・90の語順に、< 積地 > で48「一亜細亜」・49「二歐邏巴」・50「三亜弗利加」となっているところが50・48・49の語順になっている。いずれも意図的な変更ではなく、写し落した語を後回しにして書写した結果と見られる。

漢字表記の異同についても、誤写と思われるところがいくつかある。< 積草 > の39「蔓菁」が「菁」に、105「鳳仙花」が「鳳兒花」になっていたり、< 積木 > の29「竹筍」が「筍」に、43「椰樹」が「椰樹」になっているところなどはその例である。< 積草 > の78「梟公英」が「蒲公英」に変更されているのは、一般的な表記にしようとする意図的な変更であったのかもしれないが、そのように受け取れる異同は他に見られない。

究理堂文庫本では< 積草 > の17「玉蜀黍」が「蜀黍」となっているが、これについては注意を要する。前にも示した通り、ここはもともと「蜀黍」となっていたところを、早大本では「白墨」を塗って「玉蜀黍」と修正した箇所である。（ルビは左ルビ。）杏雨書屋本ではそれを「白墨」で修正するのではなく、朱書の頭注で「玉」を挿入しており、稲垣文庫本も「蜀黍」となっている。するとこの箇所における早大本の白墨修正は、他の箇所に比べて後



図版17 究理堂文庫本『西洋医言』

に施された可能性が高く、究理堂文庫本はこの箇所が修正前となっている本によって書写された可能性が高い。

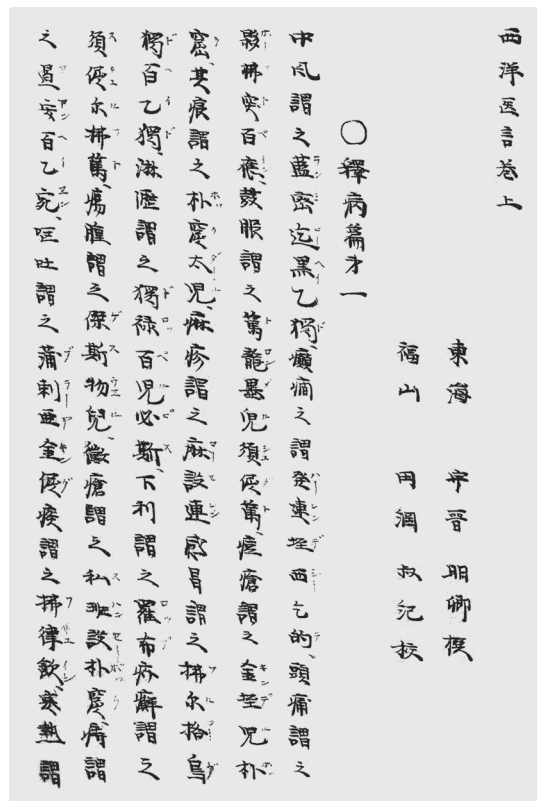
同様に、早大本の〈積獣〉で42「猫」・43「靈猫」となっているところが43・42の語順になっているところも注意しておく。この箇所は杏雨書屋本でも43・42の順になっている。

独自にレイアウトの変更を行ったために、本来別の見出し語である語を一つにつなげてしまっている例も見られる。例えば〈積地〉の63「渤泥」と64「呂宋」をつなげて「渤泥呂宋」としていたり、同じく73「番達」と74「及録録」を「番達及録録」と一語にしてしまっている。その逆に、一つの見出し語であるべき113「趨胡突加西蠟」を「趨胡突」と「加西蠟」という二つの地名であるかのように示すという誤りも生じている。

7.3. 東大総図本『西洋医言』

東大総図本『西洋医言』は、東京大学総合図書館鶚軒文庫（土肥鶚軒旧蔵）に含まれている。三巻一冊本で、毎半丁十行、毎行二十四字である。毎半丁九行・毎行十六字の早大本・杏雨書屋本・東大医図本とは行数も字数も異なっているので、対照させるのは容易でない（図版18）。蘭語のアルファベット表記は見られず、訳語に対するルビや、返り点・送り仮名も一切見られない。蘭語の音訳漢字に対する片仮名の読み仮名は、巻上1オ～2オ3行目が朱書であり、それ以降は墨書となるが、四番目の部である〈積骨〉以降は読み仮名があまり振られなくなる。場所によっては句切り点さえ見られず、完全に白文になっている箇所もあり、最初から最後まで全文が書写されているものの、写本としては不完全である印象を受ける。

東大総図本も早大本でいう改訂後本文となっている写本であるが、書写の際に写し落したと見られる語が多く存在する（後掲表9参照）。その一方で、見出し語の漢字表記を独自に変更していると思われる箇所があり、その点は注意すべきである。それは特に〈積地〉に見られる外国地名の漢字表記に顕著であるが、そのあり方から『西洋医言』が成立した時代よりもかなり後の写本であるものと考え



図版18 東大総図本『西洋医言』

られる。そのことが最もよくわかるのが、< 積地 > の52番である。この語は五大洲の説明で最後に出て来る語であるが、早大本をはじめ他の全ての写本で「墨瓦蠟泥加」(メガラニカ) となっているところを、東大総図本では「豪斯達刺利亞」(オーストラリア) と変更している。「メガラニカ」とは、大航海時代のポルトガル人探検家マゼランにちなんだ名称であり、「墨瓦蠟泥加」という音訳表記はマテオ・リッチの漢訳世界地図『坤輿万国全図』(1602年刊)以降よく見られるものである。一方、オーストラリアが大陸であることが証明されたのは、フリンダースが1802~3年にオーストラリア大陸周航を達成した時であり、Australiaという名称も1817年頃から使われ始めたという^{注5}。日本でこれが「豪斯達刺利亞」などと一般的に表記されるようになるのは、1840年代以降と見られる。(例えば箕作阮甫『豪斯多刺利訳説』天保十五1844年成など。これより先、渡辺華山は『慎機論』(1838年成)や『初稿西洋事情書』、同『再稿』、『外国事情書』という一連の著作(書名は岩波書店『日本思想大系55』1971年による、いずれも1839年成)で、「亜烏斯太羅利」や「亜烏斯答刺利」という表記を用いている。) よって、この東大総図本は、『西洋医言』の成立後、少なくとも五十年ほど経ってから書写され、その際に書写者が独自に表記を変更したものと見られる。

東大総図本にはこの他にも、独自に表記を変更していると見られる所がいくつかある。同じ< 積地 > でその例を挙げれば、29「懸泉」を「瀑布」、55「印弟亞」を「印帝亞」としているところなどがそれに当たる。ここには全てを挙げないが、外国地名の音訳漢字表記の変更は他にも多く見られる。他の部で例を挙げれば、< 積人 > 61「獵戸」を「獵士」、< 積骨 > 55「軟骨」を「軟骨」、< 積草 > 78「梟公英」を「蒲公英」(これは宛理堂文庫本と共通の変更)、< 積虫 > 14「鼃龜」を「蜘蛛」、同22「熠燿」を「螢」、< 積器 > 188「其(酢苔)出於獼猴者」の「獼猴」を「猿」と独自に変更している。これらの変更は、概してより一般的でわかりやすい表記に改めているものといえよう。

また、東大総図本では、1語だけではあるが独自に増補していると見られる語も存在する。すなわち、< 積地 > の54「韃爾韃」と55「印帝亞」(表記は東大総図本による)の間に「魯西亞」という語を入れているが、これは早大本をはじめ、その他の伝本に見られない見出し語である。

以上のように、東大総図本は『西洋医言』成立のかなり後になって書写されたものと見られ、書写者の判断で訳語の変更や語の増補が行われていることが特徴として挙げられる。

7.4. 東大医図本・宛理堂文庫本・東大総図本の収録語数

以上見てきた東大医図本・宛理堂文庫本・東大総図本について、早大本の改訂後本文と比較した際の収録語数の増減を表9にまとめた^{注6}。早大本の臨模本と思しき東大医図本では増減が無く、宛理堂文庫本・東大総図本ではそれぞれ見出し語の減少が見られるが、削除された語に明確な意図は感じられず、単に写し落しただけのものと思われる。一方、増加しているのは東大総図本< 積地 > の「魯西亞」のみであるが、これは意図的な増補であったのであ

表9 早大本との比較による東大医図本・究理堂文庫本・東大総図本の収録語数

部名	早大本語数 (改訂後)	東大医図本 対早大本増減	究理堂文庫本 対早大本増減	東大総図本 対早大本増減
1. 積病	73	(増減ナシ)	(巻上欠)	減: 60蟲證・61蟻蟲
2. 積人	61	(増減ナシ)		(増減ナシ)
3. 積体	111	(増減ナシ)		減: 13下脛・72龜頭・92中指・103其(踝前)ノ前
4. 積骨	55	(増減ナシ)		減: 10之(當門ノ四板齒)ニ次ク者ノ左右各ク一・37輔・54骨節
5. 積神	12	(増減ナシ)		(増減ナシ)
6. 積蔵	65	(増減ナシ)		(増減ナシ)
7. 積草	109	(増減ナシ)	(増減ナシ)	減: 57薊・58薔薇・79絡石・105鳳仙花
8. 積木	60	(増減ナシ)	減: 6天竺桂・7杏・8栗	減: 15榛・16其(榛)ノ子
9. 積虫	26	(増減ナシ)	(増減ナシ)	(増減ナシ)
10. 積魚	32	(増減ナシ)	(増減ナシ)	(増減ナシ)
11. 積鳥	46	(増減ナシ)	(増減ナシ)	減: 15白頭鳥
12. 積獸	50	(増減ナシ)	(増減ナシ)	(増減ナシ)
13. 積天	97	(増減ナシ)	減: 33辰宮	減: 85鎮星
14. 積地	129	(増減ナシ)	(増減ナシ)	増: 魯西亞(54と55の間) 減: 11海崎・85厄勒祭亞・86莫斯哥未亞・93加西蠟・94蘆厄祭亞
15. 積器	188	(増減ナシ)	(巻下欠)	減: 66噴咽・143錐・144鐘・185其(酢苔)ノ於人ヨリ出ル者ハ癖石
16. 積宮	45	(増減ナシ)		減: 6礎
17. 積数	63	(増減ナシ)		減: 4算術
18. 積言	163	(増減ナシ)		減: 162承順・163忠直
19. 積辞	73	(増減ナシ)		減: 69發辭
合計	1458	(増減ナシ)	計4語減	計1語増、31語減

ろう。

8. 『類聚紅毛語訳』の編纂時に用いられた『西洋医言』の本文

以上見てきた『西洋医言』諸本の状況から、『類聚紅毛語訳』が編纂された際に用いられた『西洋医言』の本文がどのようなものであったかについて、以下に考察する。

『西洋医言』において改訂前と改訂後との相違がよくわかる箇所は、言うまでもなく、これまで見てきた「長文の貼り紙」および「白墨」による本文修正や「空所」への追加記入が多く行われている箇所である。具体的には、『西洋医言』でいう<積体><積草><積木><積魚><積鳥><積獸><積地>が該当する^{注7}。これらは『類聚紅毛語訳』の<身体><草><木><魚介><鳥><獸><地理>^{注8}の各部に当たる。

結論から言えば、『類聚紅毛語訳』は『西洋医言』の改訂後の本文に拠っており、いくつ

かの例外を除いてほぼ全ての箇所が改訂後の本文と一致する。以下にその具体例を示す。

まず、表3に示した「長文の貼り紙」による修正箇所而言えば、『類聚紅毛語訳』の〈身体〉の部は、〈積体〉の語順と全く同じではないものの、その修正後の語順に近いものとなっており、修正前の語順を感じさせる箇所は見当たらない。また、修正前に〈積草〉の末尾にあって修正後に〈積木〉の末尾に移動した「根」「莖」「枝」「葉」「花」「種子」「莢」の7語は、『類聚紅毛語訳』において〈草〉部ではなく〈木〉部にそのままの語順で入っており（57ウ）、それに代わる形で改訂後の〈積草〉末尾に増補された96・98～109番のうち、99「蓖麻」・100「巴豆」・101「馬兜鈴」・104「錦荔枝」・106「浮萍」・108「萍蓬草」・109「菱」もそのままの語順で『類聚紅毛語訳』に入っている（51オ）。

次に、表4に示した「空所」への追加記入では、例えば〈積魚〉の28「鱈」・29「鱗」・30「魚骨」・31「介甲」・32「螺屬」や、〈積獸〉の42「猫」・43「靈猫」・44「狐」・45「狸」・46「角」・47「爪」・48「足」・49「毛」・50「尾」などは、（小異はあるが）いずれもほぼそのままの語順・表記で『類聚紅毛語訳』に入っている（〈魚介〉48オ～ウ、〈獸〉46ウ）。

表6に示した「白墨」による修正箇所でも、〈積人〉の52「泥水匠」、〈積草〉の28「敗醬」・54「紅花」・66「水慈姑」、〈積木〉の44「鐵蕉」、〈積魚〉の9「蠔魚」・19「比目魚」、〈積鳥〉の4「鵠」・7「家鴨」・8「野鴨」・15「白頭鳥」は、『類聚紅毛語訳』において全て改訂後の語となっている。

以上のことから、『類聚紅毛語訳』の編纂時には、早大本でいう改訂後本文の『西洋医言』が用いられていたことは間違いないものと判断されるのであるが、全て改訂後の本文の方と一致するかというと必ずしもそうではない。「白墨」による修正箇所のうち、表6の〈積魚〉「鮫」→6沙鮫、「鱸魚」→18松江魚と、表7の〈積魚〉「泥鰍」→17鯪魚は例外的に、『類聚紅毛語訳』では修正前の「鮫」「鱸魚」「泥鰍」が掲出されている（47オ～ウ）。この原因は不明であるが、一つの可能性としては、これら三箇所の「白墨」による修正が、他の箇所よりも遅いタイミングで施されたものであったことが考えられる。

9. おわりに

以上、現存する『西洋医言』諸本の分析を行った上で、『類聚紅毛語訳』編纂時に用いられた『西洋医言』の本文がどのようなものであったかについて考察を加えた。早大本と杏雨書屋本だけでは「白墨」や「貼り紙」の下に埋もれた文字を十分に読み解くことが困難であったが、稲垣文庫本が世に現れたことにより、それらの文字が容易に読めるようになった。のみならず、それぞれの修正の時期に至るまで、より詳細な分析が可能になったと言える。

本来であれば、それらの修正が加えられた理由について、蘭語と訳語の関係に着目しつつより深く考察しなければならないのであるが、その余裕は無かった。今後の課題としたい。

参考文献

- 杉本つとむ 1978 『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅲ』（早稲田大学出版部）
 津田進三 1983 「石川玄常について」『日本医史学雑誌』29-2
 宗田 一 1988 「宇田川家三代の実学—『西説内科撰要』と関連薬物書をめぐって—」『実学史研究』
 V（思文閣出版）
 飛田良文 1993 「森島中良撰『類聚紅毛語譯』の成立について」『日蘭学会会誌』18-1（通巻35）
 櫻井豪人 2004 『『類聚紅毛語訳』附録『万国地名箋』について』田島毓堂編『語彙研究の課題』（和泉書院）
 中川 豊 2017 「稲垣定穀書写年表」『中京大学文学会論叢』3

注

- 1 杏雨書屋本には巻上と巻下に丁付けが記されているが、その丁付けと本稿で早大本に付けた丁付けは全て一致する。
- 2 そのことは、早大本においておびただしい数の頭注が記されているのに対し、杏雨書屋本にはほとんど頭注が記されていないことから窺える。
- 3 早大本や杏雨書屋本では、巻下の全ての部の末尾においても「空所」への追加記入がなされている。（墨付きや字の形の相違からわかる。）しかし、稲垣文庫本の巻下は既に追加記入された状態で書写されている。（稲垣文庫本において墨付きや字の形の相違は感じられない。）よって、巻下の「空所」への追加記入は表4に入れなかった。巻下では本文の途中に増補語を追加することがなかったので、「増」と記すことなく改訂前の本文の後にそのまま続けて書けばよかったのであろう。
- 4 石川玄徳は、杉田玄白・中川淳庵・桂川甫周とともに『解体新書』の本文冒頭に名を連ねる医者・石川玄常の子である（津田進三1983参照）。玄徳はこの時の会見を『西客対話』（写本）として残している。その現存伝本は極めて少ないが、広島の小川古医書館（小川新氏、普照小川医院）に所蔵されているとのことである。（小川新氏のブログによる。）なお、大槻玄沢の『西賓対晤』（写本）の「甲寅来貢西客対話」にもこの時の会見の様子が記されている。
- 5 小学館『日本大百科全書』（1994年）「オーストラリア」の項（谷内達氏執筆）による。
- 6 究理堂文庫本<積地>における外国地名の切り方による誤りは、「増減ナシ」として扱った。
- 7 表3～表7を参照すると<積骨>や<積天>にもそれらの修正箇所があるが、修正が関係している語数が少ないので、修正前か修正後かを考える際にはあまり参考にならない。
- 8 『西洋医言』の<積地>には、『類聚紅毛語訳』の附録『万国地名箋』に見られる外国地名も含まれるが、『万国地名箋』については『西洋医言』の<積地>からではなく、主に桂川甫周著『新製地球万国図説』や同『北槎聞略』付録地図によって編纂されたものと見られる。拙稿2004参照。

付記 本研究では、『西洋医言』所蔵の各機関ならびに小石元紹氏より、資料の閲覧・複写・掲載について格別のご厚意を賜った。記して感謝の意を表する。なお、本稿はJSPS科研費「刊本蘭学辞書・単語集の基礎的研究」（基盤研究(C)、課題番号JP19K00641）の助成による研究成果の一部である。